標注そのゆめ

四

へ13
3095
5

べ13
3095
5

昭和九年
七月二十日
求

雨後の樹下閑

曲亭馬琴つくる

實雅の藥ゝく謀ゝ巴ゝ

集滅道の名ゝ
書ゝ注せり

雨後の樹下閑

實雅の藥ゝく謀ゝ巴ゝ。苦集滅道あく。河原柳只九郎ゝ形ゝふさと。
まつべし香絶ゝ。尊雪姫とやりもじ。ゝゝ紀ゝてゝゝゝゝ。
孫十郎もゝのゆゝゝ居ゝ彼ゝ追留ゝく走ゝゝ。ゝゝゝゝ。
ゝび謀ゝも易ゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝ。
ゝく蓑の泥ゝ洗ひ。ゝゝ清水ゝゝ。ゝ門ゝ家ゝゝ。
ゝゝゝゝく立ゝ。ゝ治ゝ只九郎ゝ三人ゝ紋淳ゝゝく走ゝ。
直ゝ實雅ゝ左右の肘ゝ引ゝく縛んゝゝ實雅ゝゝ。
ゝゝゝ只九郎眼ゝ瞪ゝ。ゝ愚者瞪ゝ太ゝ

相語ひ吾侍ふかりしこと人々い。薄雪と棄まらせそう。いぐく引ぞう ゆさてく
事の根吐出さるんと罵つ。素りくいく括り若腕と細き足とそろく宙ふ
舁らくゆくふと。実稚い只呆き果く。せんそべるうげるかくく只九郎い
実稚と扨く主の宿知ふまうう。庭門うう久く。様ら近く引居人涙て
とのはといるとるふ師門い只平ふ太口さりとて。端ちう立知細の上ふ
長ふとせしく。袴ひまくどにまこ揚賛と張肩といるしく一目ふ直下し汝ホ
るぐくくぶらふくとび伴ぢして。実稚と縛まるぐと問ぶ只九郎ぐくく
膝とまるめるぢら十分ふ謀とぢ課くく。薄雪姫と轎ふ乗ふ。只顧ふ
路といるぢしく。苦集滅道ふく扨れる処ふ五七人の大男蓑隠ふ立ふい
ると。矢庭ふふの三人と捕く行濠の中ふ投入と直五義雪と棄取ふ往方ふく
ふくぬるるとぢら表ら勇といるども。彼ホい大鞜ふるぐゆるふ敵ふる課と

怒地日眩く物の善悪とまるぐるしぶ。ことと追留ふ及るどるく なりくい実稚が
別ふ賊主と相語と。中途ふう奪去とるとぶじとい常言ふふ猟犬労ーて
麝ふ捉ふるくふるくこの愚者と練ふるく殿の判釣ふるしるる
といふ。師門歩く大ふ怒ふ。既ふかくの如くるるぶ。実雑ふる絶とをまるぢ我ふ
賣彼ふふて。薄雪が身價と。ふるぶ。やとる実稚汝何人
ふ妹と奪ーるる。くいく。告ふるく。いさまるあらく責問ふ実稚ふやとく
呆るとくいふ呼とまるぐど且くして首と壜ふ項日いくるめるとと耽ぢて。
ふるぢ。ぐくくふふ主ふ。何の賊めるく妹と別人ふ賣ふぐさり。五ふ疑めぐ我ふ
寃といるるるく。賞金の手ぢしるの計較るるぢ。こい富人出ふげる。獄さぐさ
るる。といひもるるるぢふ師門勃然とるく眼と聟盗勇猛ーるく。いぐいるく
るのるる。汝るるとと都るるぐるる却く汝と都くといふるーおぐどいるるめ

和俗の常諺犬骨折くるるるるるく
といふるる骨しと切るるる
の謂るう
范蠡文種ふるるるるるるる
蠡るるるるるるるるるる
弓折れ狡兎死ーて走狗
烹るるるるるるるるる

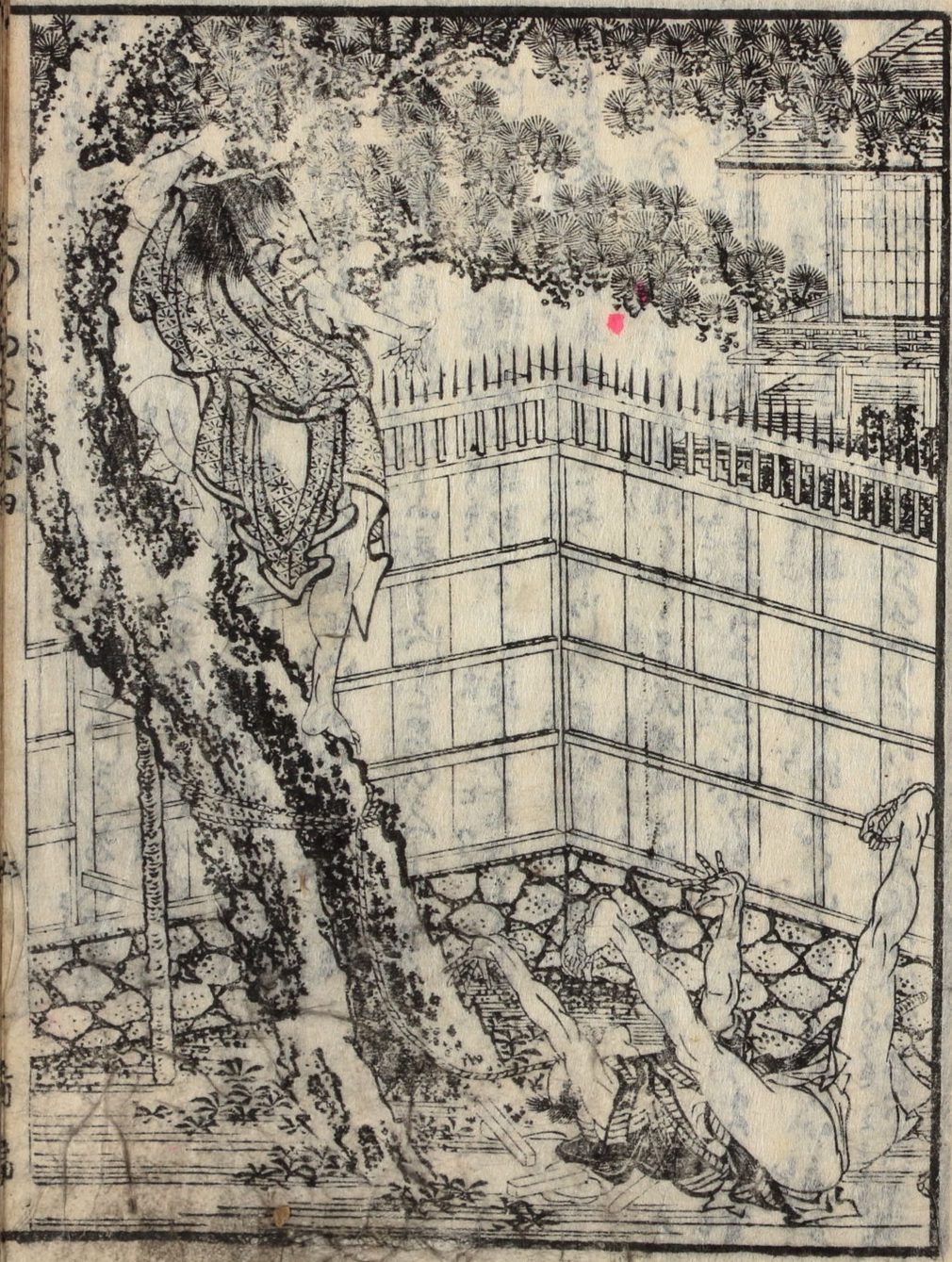
實を吐んとすれども。只平走りに下へ。橋のもとに高く引れ兄只九郎をも。
管を取て。實雅を散々に打擲し。實雅は苦痛に堪ずして。其中に恨を。
こらへかねて。罵れや皮破れ肉裂て。鮮血表を流すと叫ぶ声も細く。
のどに塞て。多地死なんくとて。師門の形勢をうかがひ。顔に水を吹かけ。
蘇生さすれば。彼庭の松に繋ぎ置て。只九郎を近く招き。
者奴が膳の大なる。雞卵をもしらせて。輙く首伏へ。
と捕へ。こらへ兼て。実雅が霊にこれを詫びてこそ。
出ぬるこそ。世の常と悔る。あふ迂遠の謀をなして。
悩をもて。杖をもて。さて八郎は健なる大兵五七人をもて。
玉の方を引ぞ。はしゆ。曉得らるべしとて。
只九郎能者として。領度し。忙しく走去ぬ。二人の奴隷も跟あとさく。外面へ

雞卵五云
雞の大なる
蜀漢の姜維
死せるとき
膽と割て
とりて大サ斗
のどに塞て
姜維嬉戯
題せるこれ
火兵
火い粉と同
じ一くさの
兵なり
煩悩
智度論に
をしく煩
くなる故に
又云煩
に属し慎に
属し癡に
属とこれを
煩悩といふ

師門が玉の方
と捕へんこと
なれば項王が玉
璽が母をとら
へ曹公が徐生
が母を養ひ
謀に
蛍三ツ四ツ
云云
清少納言枕
草子に夏は
月のころ
いさらえて
もるは蛍
ちがひたる
るぞのつきて
ぞ

退出る。師門は又只平を呼て。実雅を。通宵翁脚蚊
に食はせよ。これは只九郎が呼び寄るまぐ。酒盛あるべくこの熟鴨を冷なん。
酒も肴といひつけて裡に入れ。只平はあるじと應て。かと持て主に
從ひ。障子を引立て入りぬ。その時日は暮て。雨歌を天に晴てこそ。
庭の木立の藪こそ。闇も外にふらぬ蛍三ツ四ツ二ツ。飛ちがひて。
草葉に寄る秋潦に風情。ふらと人の涼しきもとて。実雅は
いとくみとしく練られて。憤に堪ずして。前面なる樓上に女子のうち
和ぶ声。どとく。撥拍糸竹の調も奥めつげるに。これも主人がこれに恥え
ぬるこそ。いの〳〵鈍くも寝たしく。日は師門が耳言とくこれを絶へ
ぬ。薄雲と要んとくの謀略なしどこれ曉らどして。併に入りぬるこの
朽をきよ。阿容こと稀なりとく居らんに。夜のうちに殺るべ。さて

実雅ハ師門ノ庭の松ニつるゞ
る潜ハ縄を切解逃去
んとす
疵ノ足の怪ふ
あるめ



師門ゞ睡と行く。即房ふ酒びゆと脇さろ刺とれしく袈裟雪んふ。とひろどろ。
ろどし其方と覗著く立てろしゞ。又ろふゆろ。れ今ひてく行とて熱力日
ふのどくろらぬふ身ふ寸鉄も常どしく。彼ふ近づろい郭竟し。強く竟を
所ろとんろう。ろと匙ろうく鳥部野ふ赴き。乞児と結果て彼百金ふ
奪取らべ身の居家を求ろふ易ろどしとろひうんう。ゞく松の幹ふ搦著
ろどしろうじく縛の索と搦縛ゞく。庭ろう本作ろく。窯垣と踰んとる
わしも夜行の走卒樵子とお喝らしく茅かしが。癖者ろと一声叫び。
引とらんとく走ろ彼実稚とゆく足ふ揚吭と蹴と。仰さろふおろん
さし。溝を飛とく逃亡ろ。音羽山ふ西の方。べしとも去ろうろと霄
の間いろろふ実稚いゞどゆらゞど孫十郎い空洛ゞゆとも彼人いく遅ろ
ゞゆとし。親のところい東の間も。ろひゆりせちろうの彼ろふ物憂い落雪が。

今霄いろふのとろん。ゆとくくの音絶穿ましくかさ口説ろひ。とゞまの垣い前
ろうあろふ駆ろわく。ろろい。孫十郎ゞ家のあろうもゞゆとくくろどし
ろろしく立ゞ。忽地惜しく走ろうろく。さく怪とのろとろふのろ
方いゆう胃ろう驚ゞろい行ゞどいとゆろとろいまの垣い近ろうあう
く。外面と指し。ろろい目今彼知ろゞゞゆるふ鉄ふる鉄巻ふふる脇當
ろろる武士五七人。物の蔭ふ集合く。あの方と走らるる知。といつとゆろと
走ろゆろ行ろう。ろ。原日のうの蔑覚く。六波羅ろう詰ふ向ひろろふ
あろぬろう。遮莫ふ彼東く擒とろどろゞろあのろど。ゞゞ脱ろく経い脱れく
えゞろうん。誘ろうとゆもあいど汚しろひろと物ろど一枝ふ包て呑み
ろう。著太力と跨ろく。ゞゞ背門ろう玉の方と落しまろゆろの身も續ろまろ
生んとと時ふ河原柳只九郎い夫兵と狩く長門ろうろく奇ひふの方い

清閑寺
清水寺の辺
已ふのもとの
うんふ数の
中山あり

いづ知れぬ所を見いる可ふ領師門どの仰と悪く思わるるのくやづきをまらと
あと思ふのんと呼門とい通い歩うんくく走うまふの方ふちうすゆう六波羅の
討みうとおひつるふ思うしい師門どのく家隷くまるふ思ひぐさいよ
呼門ら人ふえうふ高人無四郎と稱く。落雪姫と伸ひやうちとる男ふ白遅い
ぢ。ふるる怪しくて更ふ思ひ量ぐうもあらわどくもう絶ふ思らぢ
清閑寺のあとうちぐくも出ひらさあとし。孫十郎ぶゆふふあぐ。ふとなぐ
うらく分明ふまるとあるべとやつ。烏夜道を扶引く。只顧ふ走うく。
只九郎いるふ世の歩ふ悔く。寺ふさうぶ思じとあれふ騙迫しく捕捕
んとく。まべく門ふうくく磨もせど。折戸ふ押ぶ隠ふ向く行ふつと入くく、
又見べ只今逃法とるべしくく。物あらふふ引ちし背門の遣戸も倒ふさう。
こい女子とふひ海てく。あうふ穏便ふしべ彼ぐ染色と暁得く走う

石覚
ふ横ふあい
ぢ失錯の気
ふうの下ふ集
ふふふふふう

伏屋
ひとひくき
ふふふふふふ
ふふふふふう

んりこれとうん走らせくい。昼の石覚と雲ぎぢ。ふく追留ふく集爆て。用
意の松明ふ灯燈の火とうしつ。ふりふとりふとりつ迫ふ暮ふく追ふうる。

伏屋の蛇遣火

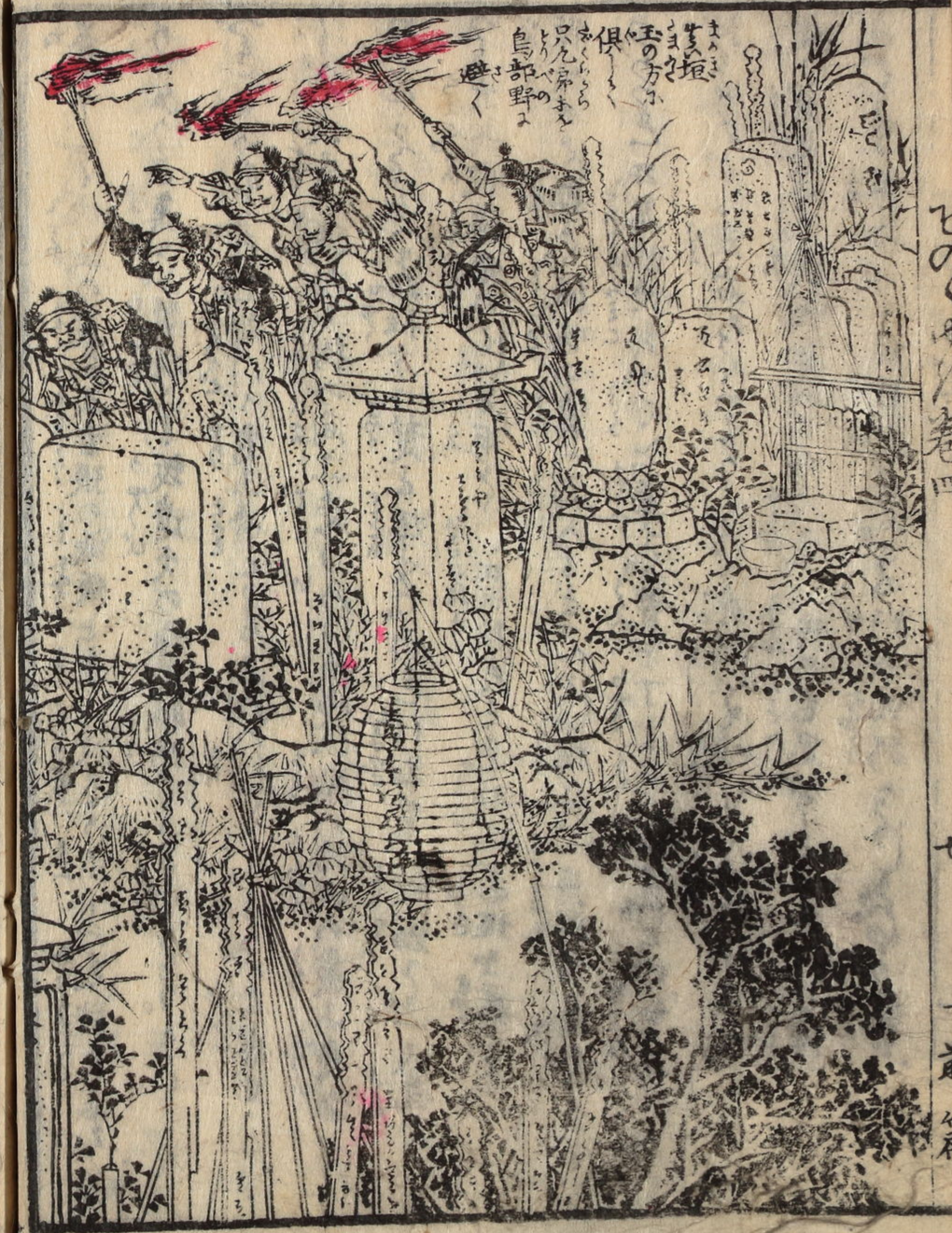
さる行ふ面の方い行の鼓ともうふ。ふうのとどうとく。ふくも沒走う
ふうぬふ。ふ垣いふふ横肩ふ撞ふしく。只管ふいふがどども。路いと闇くそゆく
先ふうす。清閑寺と走うるとく。鳥部野ふ逃ひ出一息吻ーふふうとび。
忽地松明ふうてして。只九郎真先ふ追ふう。ふどし行ふうふの方ふ主好
意ふとうく迎ふうんと宮ふうふ後ぐうふとふとい。逃もふれ躰もふれ。
ふぐうく何地ふう腹ふぐふとふぬくい。ふの垣ゆうく大ふ怒う。汝ふ弟の
兵四郎とう名告ふる男ふあうぐ。今ふうくびうふの人ふえふの言と少ふく。
汝ぐ奸計と猜ーふう。女子ふあふと磯江松主ぶ妹ふ。ふの垣とふるとなりえ

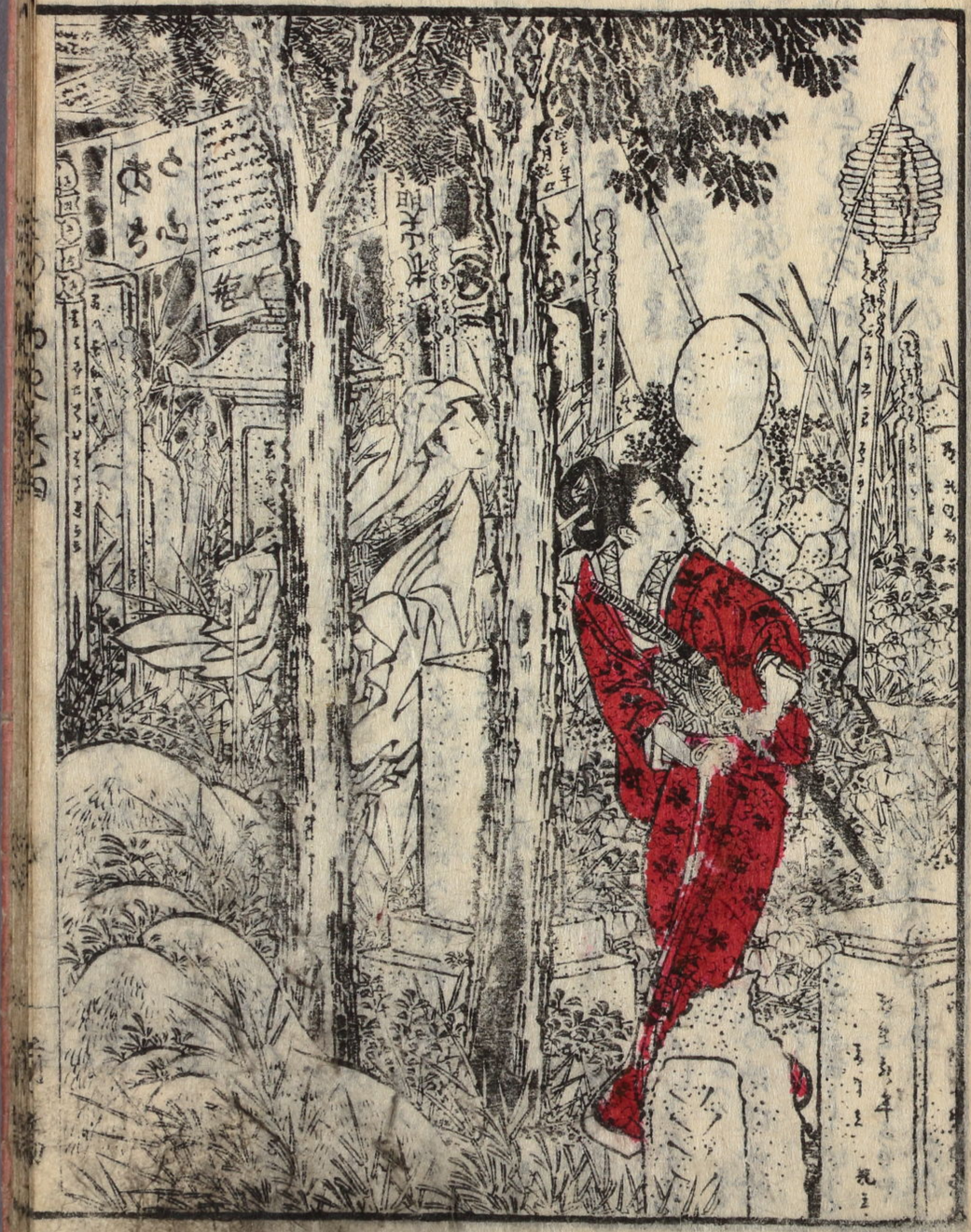
古長き云云　婦人の多言を長舌と云ふ詩経解仰の篇ふんそう常公歌ふ歌もつぐろひ孟子ふ小国ふ大ふ国ふ小ふ国ふ大ふ云云

戰と競と　かの危を懼るのうくらろう詩のふ雅小是の章ふ戰戦兢兢として深淵ふ臨が薄氷を履がごし

あるものぞ。ゆひ伤ふく可惜者を喪ひそと罵ふく力と図りと謀放ば。只九郎も大ふ怒りとい舌長き女なり。ゆ是勝負をいさまくふぞ。大兵どもこれ為らじと聞く。その垣をとい中ふとり囲を嘯嘖ぐ戰ひろう。生の垣い女子ふ似げ。切雑ろう太力あいさるとい好を。ゆぞよいと勇うりんぐとわと拄彼と防ぐ。既ふ大兵一人と切ぐ二隠とな。三人ふくめ負せろう。まろうとども宮かい裏ふ敵しがく。その身も疵傷つけらると目眩くくうの太刀も去ぐろうると。只九郎得ろうと後方ふ立ちろう。腸ろう膳ゆぐく。力尖ふく切つくとば憐ぶし。生の垣い髑骨ひとひらさ。多地撞と倒ぶろう。ふの方い生の垣ば防ぐ戰ふ仏又ろうと。走ろうも沼ぞ。ゆも沼ぞ更ふ生る。ゆもろう。戰ろ競くとろうぐらのある人い絶ふ絶ぶとく。敵ひらくくと追ふとば。いろ沼ぞ。ろ躍ろ。ゆあるとろうろふ並。松仏柱ふとろう。竹仏棟木ふろうし。荒ろう屋

峯とろう。伏屋の裏ふ反古張の紙帳と垂ば。伏屋の前ふ茨枯草ふろうのりふろう集ろう。焚捨ろう蚊遣火のろ仏滅ばろうるあろう。ろくも脱るべき身ふあらねど。師門ば高ふ檜とせらるんい朽ろう。さらば自害せんとぞ。伏屋の後ろう。松の間ふ走ろうろふ仏敵い紙帳の裏ふ逃ろうるひ。ゆろやえろぶくん。往方い楚と認ろう。あ是引生ぞと散動ろう。一人先ふ出ろう火兵彼紙帳の匂を取ろう。裂捨んろと。特ふ生の垣ば屍ろう。一園の陰火ろえ出ろう。紙帳の裏へ飛入ろとえ。裡ふい一声阿呼と叫ば。一人の乞児あらろと出。忽地火兵ば力と棄ろう。首と丁とお幕ばば。ろの勢ふ辟易ろう。ばろうのぞも左右ろくいろうもつぐぞ。ばしも吹ふる風のゆふく。敵貴火裳と燃立ろう。只九郎いろの火光ふ件の乞児とろうくえとば。薄雪姫仏ろぐろう取んろふ相語ろう。ろの野の塞仏ろうしゆふ。ゆろう驚ろ。


玉の方ふ
俱く
只九郎まを
とりべの
鳥部野ふ
避く



ひとりの乞児。彼只九郎とえあらそふる。いづれの行ふ腰ハ立てる。同士討せんと
ゆきもとめる。乞児いゆもあへず。血刀引提てあて懸るに。只九郎ふさぐ向
答ふ及ばず。奮撃突戦いまだ十合ふ至らざるふ。乞児ヤと叫て太刀
ふ。只九郎が首通ふ飛んで叢の中ふ入り。軀ハ倒れて失ぬ。人ども
うの景迹ふ舌を掉ひ立足もなく逃まるど。乞児ハ電光の如くで
追駆はして。一人も餘さず砍殺し。舊の処へ帰り来ればとて妻子と共ば
しくて。年紀三十ばかりの女と十ばかりの女児と。前ふり紙帳を跳出
く。只顧ふ驚き足を且怕を且結ぶこと。いと胸苦しき様色なりしふ今も
見ず立ちる所へ。ゆきて夫。答ハ行ふ。いふしく寒さる足の俄頃ふ歩
きるを見ひ。行の有ふ恨ともなる人ハ影殺しまひぬ。いと不審し。いと
ありとなしといふ所。乞児ハ何さも申せど。ふべからふ茨城ふ帰ひて伏屋の

まふ布よ。松の樹蔭ふ伏ゆを。玉の方と誘引まあらせ。もの見ハ下坐
ふつのあく。妻と女児とその後方ふ居ならべ。土ふ著てゆを。
僕ハ先君秋光朝臣の舊領。丹波国氷上郡奥小野尻猿部小畑西谷。
うの四箇の村長とゆあづうる。栗門伊太夫ぶ一子。佐二郎とうを
りのうり。十年あまりひし。公務ふ勤く播州ふ赴さ。ふらざる室
の河曽比。汀井といふ製うる。通路の数もかうく。彼早晩結胎
しぶいて捨ふ。ふ捨ふ故郷ふ帰る。行ふ。又いく
怒りく。家ふしも寄つけず。遣失つる六十金ばかり納るべ。舊の父
子ふ。ふ。さるくいるぶ子ふあらずと。少ハ世ふ。ふしく。後母朝
坂。ふ見ふ。黨ふ渡九郎ふんどる。
ふあれバ。里人とうのくく。いふ勸解とどもるのかひし。うくく己

伏見
太享記書に伏見の翁い何のところの人なる伏きちゞ和州菅原寺の側なる崗ふ助て三年又蘇ふりのいのぢとなるの助延とるづく卧見の岡といふ以翁ふ名づく助見と後人伏見ふあらむ

とぞ汐井とおく伏見ふ起き楚平といふものふ使つかくこてふ五六年うらさ世ぞうる時しも荒年おつづく活業とぞ世ううく なる。剰楚平夫婦ハ時疫ふ分やう。僕夫婦も又ハ病ふ沸騰く命危うきぞうる先ある夜の夢ふ鬢髪結ふる童子ふ猛火の中うり救出るとこ云ふるとあり。その時童子告ふ汝夫婦と救ふ善報とるとあいあらむ。年某の月某の日ふ厄難あり。その時汝とりく救りとづき因縁あるふしるくるる。汝ふ今度必死と覚るとも。倘怒ふ中ぞふとあらば後亦衰と生るとぞきる。と示しが果しくるの年疫ふ係つく。夫婦ありとも病即四五十日ふ及び。うらじく活るとぞ僕ハ亦遂ふ腰くぞ。いう世ぞうる便るれば伏見の郷とやどぞ出親子三人も食しく惜

うらぬ露の命ぞ繋ぐふも。故郷のあり又のる。ありひ高く隙もなく。彼六十金ぞふ調達しく丹波ふ及ばば父母も勘當を赦さじとも宣ハじとハの一椀の飯一文の銭も人の恵ふあらざるとぞ。ぞるるかるぞ乞児の分ふくい。影の金のとそのふべきふあらぬ。十年ふ成る親の安否と問ひで遥める哀しさふ。うかうぬるとい。うるうがう。近属師門ぞ家隷河原柳只九郎兄弟とうるぞ。影計の弱冠ふかるうるいと。幼の外なる虎落しく。百金と椋とう。清水寺の境内ふ潜び隠ぞ。ぞるるぞ人の女児と取り出ぞる。悪の報ハ翌ともきるぞ。甲夜ふ件の弱冠ぞ走り来く。僕といく。ふ伏せ懐と掻捜く。彼百金と奪ひとり。いぶ地ともるく逃亡ぬ妻子い偏ふあうぐら。かる時物の用ふハるぞ。僕ハ又襲ふく。ちとと爭とかうかハれど。引とめるる袖と放ぞうる袖ふ。その袖ふ離くるふ

生埋申夫
佐二郎ホ
憑く
玉の方
を殺す

御守護
山ゆき

邂逅ひろる百金ハ一夜もすぐ又舊の乞食せん男のこゝろさふらく
ろふもひくさん袖を敷寢のゆ枕も曲く目睡もあと一人の女子
怨怨と走り来くこれい小野少將秋光朝臣の老黨磯江松末の塚
主垣ろう秋光の内室玉の方目今師門ゆ徒ふ追ひろゆ男も既ふ
結ひこゝ且汝ゆ相語ふく師門ふ遁さんとろうたる未通女秋光
の息女薄雪姫ろう。汝ろの人ろる紙ふらどといひども。父の爲ふ恩
高き舊領主の息女ろる紙。歎引出しる罪脱ぎ出しこと紙
贖んとならばこゝ玉の方を救ひたまへ。神汝ゆ皮肉ふろけ
入りく。蹇る足を立し力量早救ひたまへと說とう沓と丁
と敲くとく。一声叫びく驚き覺岸破と起ぶ討手の奴原紙帳
を引裂捨んとと。つゆ見ふしくろゆ足の立紙怪むふ邉あらど。只九郎ハ

いふもさつろう五七人の火兵どもを立地ふ殲つしぬ。とふぶ過紙
顧ぶ。童子の示現を忘却く。六十金を調進しく。父の恕紙寛んと
ろ。一ろゆの惑ろう。薄雪姫ふ憂とんを奥方ふ歎をきさし剃
今實の危難ふあひしもるとふ千悔万悔晴を嗟ふろのひは。彼ハ妻の
汀井。是ハ家鶏と為ひく。伏見ふりしとき出生きる女児ハ師門
ふ相語ふる佐二郎とあがんふいひく赦しるふべき。只変成男子
ろる。真垣どのとろしく召ぶ。彼ハ誠忠ふ名ハ
ごとも死とく仕さろ紙。あを恩免あをしと。ろうはもいと
面ろげん妻と女児い顔ふろハ。そどめく知る縁由ふ或い驚き或
ハ歎ぶく汀井がゆきと。佐二郎ごろからぬとふ相語ふく金紙
ひくるとしハ。ゆく匿く告ざれば。夢ふぐもまらざりしさる故ふ癡者

物狂ひ泣くく処まるとく。夫ゞ罵り叫びく〜と死。乞児の家ゑ行うあらん方
捨てくるとうとうとうとうとでわく追いざりしゞ今ことを忘ひあれば
廣莫沙まぐゝゑ先非を悔てく歎きなれば。身の賤とを嫌ひのゝぐ。路
の案内ゑ召俱さもさひとあと勸解みろ。あの方つくくと少すひく
漫ゑ涙さくゝ。寔ゑ美姫ゞ精忠い男子ゑもいと稀ろ。ろ
のゑゑ死く。後のゝ沙汰ゑ托そ。いろゞ宿兎とるべき。ろくあを
縦親沙ゝゑ起るとも。虎落くく孝ろらんや。世の人の惑ひろると
とおろんゝと且もし浜ゞ夢ゑ童子の示現ありしとゝふと全く
清水寺の觀世音ゑくゝ〜ゝもとゝ。さらゞ今霄の厄難も脱ゝ沙
因縁ろん。又浜ゞ湿ろ百金を奪ゝ去しとゝふ弱対い行りのあろゞ。
いとゝりとろきゑ。新藤ろ片袖あらゞ。ろゝゝゑ人ゝゝと仰ろんゞ佐二郎

あゝ〜と癒く。懐と掻捞て。とう出く進らまる沙。蚊遣火ゑさ〜く
えのんゞ。疑ゑべろもあらぬ実稚の単衣ろう。さくいろの人も悪摂の影計
ゑく。妹と虎ゑ与ろると暁得ろゑゑ。浅はしきゞく悲〜くく。かの
片袖を顔ゑ押當潜然と泣ゝひしゞ且くく〜く宜ゑ。実稚さん然
ゑ引ろく。ろゝからぬ道ゑ踏惑ひろんゞ。ゝのく他人い恨むゑ足らゞ。只
ゝひ絶ゞろゝゑ薄雪ゞ。所領の仇ろる師門の妾とろうく今霄ろう。
枕の塵と拂ろらん。痛〜さくと宜んゞ佐二郎ゝく。いろくゑいある
ゞろらゞ。ろの故いこのゝくとゑ五七人の荒男ゞ。彼孫十郎とろんと
縛め。兩袂被ろる轎と舁せく。忙〜げゑろの野と過ろぬゝくとゝゝんゞ
人ゝく。只九郎ゑ待伏せし。姫と奪去ろるの執。ろいろゞ
ゞろゞ。あろあろとも彼も是も。ろの色と愛ろゑ起るゞ内命ゑ義を

総角
書き出し故事に人の知れるものを用ひ、もじり髪と来るに総角と故に総角と云ふ

そもじ。中の奥方とは僕が故郷に伴ひ来りし後、やとく姫の世方を索ねるに。誘ふと促すとせば、彼の方いろ〳〵と安らぎ。いろふ慕雲は師門が家にしもあらざるとも。あらぬ〳〵救ひ給ふ。又丹波はいろ〳〵人の舊頼なれども今は師門が知ところ〳〵加護も。其の氣色あり〳〵と。十年以来遠離居るといふ故なり〳〵立ち寄らば。又も答へなど。人も疑ひなんと。彼岡に由縁なきあり〳〵もあられど。なほいろる時に訪ふべき人に。あらぬ彼方ひめぐらせば紛ふ路なり〳〵なるに家さへなきといふの別ふ。なるべき里にあらぬやと問ふに。佐二郎答へ。なるに聊も妨なし。僕が総角のとき。父佐太夫過ぬ。あり〳〵。所帯を改易せらるべきしに父とともに驚き慌ひ。漁倉に帰り〳〵只顧歎きまうせしが。秋光朝臣あん〳〵教訓を加へらるる遠よ

果れもく
橘玉集故法
「もく故法ふ
やうとそろる
人もまた死なる
の山路のつひ
の友なる
菅原の高嶺平
方与集四巻
「とりへ平や
ちーのこれ
の本ろうん
遠とろうく
を月ふ

好さもさひふとの恩恵の高きとを父もをろくいひ出でく。りが兄孫
さらんりの志失せとやせしと。なるに耳底ふとぐやまとろ。父に愚直の田舎人
なるとども。なぞや老實ふく。恩義ふ違ふりめるらど。今は世ひとあらぬたば。
欲びく舎弟なり。つぐ勘當も許をべ〳〵。なるやも佐二郎がやうをふ
仕〳〵とのふ。死〳〵く影の年と経る。父とふ〳〵まらざり。人の
信もあらんと。彼の方黙ひく。かくぐいふ推辞んいろ〳〵。やあく
笑の垣が亡骸と。かし沈さやく。ぐやと宜へば。佐二郎いく〳〵信ぶらて。
僕もさあとなりんとも。いふ〳〵へうう。今ふ至遠。洛中洛外貴賤も賤なも。
果い遠ろう遠らるつひの友なるひとの煙をとうく出る月も。鷲の高
峯のそろと。ゆく。さとく訂井ろともふ。の垣が屍と扛りくあく。
松の枯枝を折うるね。ぐく蚊遣の火とろもば。父ろく一堆の薪の中ふ。

四大ろぐく消散せ。正ふ是萬里の黄泉越店ろく。三竜今夜雄ゲ家ふ落る
情べ〜又悲べ〜。かくて玉の方いうろ合せる寺ふ哀悼の涙と沃ぎ念仏
数回唱つ。赤猪水寺の方ふ向ひ表し伏ぎて退きさくべ佐二郎行井ろ。
破ろる簑とうろ被せ進ろ。笠ろぐ人ふ怪わろ是さる
やろふ〜ら〜。女児家鶏とふく。夫婦玉の方の後方先方ふさら。やぐ明め夜
の暗ふ紛れて。右ふ左ふと勦梭。丹波と投く農足とり。

高嶋の八重山

高嶋八郎の名八重山八つの山とさ〜とりふあるとりいつも重てとる山

今津の走り船

近江國高嶋の八重山ふ籠れる盗賊。第二の頭領小殿荒平太ハ苦集
滅道ふく只九郎ふ三人と和ろふ〜。孫十郎と生拘くふ賊ふ薄雪
の轎と拉〜。大津ろ船ふ乗ろ。通霄順風ふ走らせろし程ふ。ふ
ろる反化ふ。天ハ明めくと明ゆろう。抑ろの山の砦ハ石と疊畠と穿僅

岩

白會ふ柴ハ山居ふ木柵とろてま又裏ふ作る

鹿垣

柵ハ元鹿ふ似せて作る

ふ一條の道を切ひらく。四方ふ鹿垣と結ゆし。正面ふ門あるく。門と寄
るものハ人ふあらぞ。一頭の荒熊ろうとの熊ろく賊ふ狩く。そのふ所ふ
ひくくと人間ふ異ろらどとぞ。かくて荒平太ハ孫十郎と禄の柱ふ繋留
さく。薄雪姫と轎ろう引出く。一人の小賊とりく。第一の頭領榎嶋
夜又太郎ふかくといはとどべ小賊ろと引く後堂ふ到る。ちぐもあらぞ
走り出ぞ。榎嶋大将ハ白酒ろ酔醒ぢく起ぐぞ。ろぐろ密と
ふ〜ぐ引ろんろといふ浩処ふ麓の方ふ當く法螺の音高く少。
荒平太耳と側く。ろハ旅人の小ぞ暗騎とたぐぐ転ぐるぞ
ろとひもあつぞ。六尺あろうの金根棒と引提く。真先ふ走り出れぞ。小
賊ども是首彼首ろう走りつぐひ数と盡〜く従ひやく。ろのとれ一人の賊
薄雪と孫十郎とえろく。吾倚今悉く山ぶ彼ふ隙ふ行く

金根棒

筋金ふさろ
棒ろ大平記
ふ見ロ

逃亡らん。この女子ともいく縛ぐやといひぶ。又一人の賊微笑く。汝い新糸
ろもびいもど縁故と為るはしんこの処へ捕まるるの柵の外へ逃出ることを
とれい門ぶ寄る荒熊忽地引裂くことを殺をぐし。やゆく彼い女子の
ところう。いやくふちくとも行う苦しろべきといふ。ぞめ言いもど縛らざるふ。
熊い様のろとうふもく。薄雪主従を瞻居さう。新糸の小賊いこの形勢
ふ感伏し。二人ちつとおく走う云ひ薄雪い孫十郎と顔えあひ。只身
の薄命ぶうち歎きのふの外ぶ。且くしく孫十郎い熊ふ對ひくいつやら。
夫熊い陽獣ふしく。祥男子ふ夜ど。兆公侯ふ癒ど。故ふ外勇みて内
義ありとむしある博士ふ学ぶいろろとび義ある獣と稱らとろぐら。山賊
ふ使役ちらと。悪人と助けく善人ふ仇ちらとひるね。ゆこの姫と助
ゆきびいぐ身と殺しく。故ぐ懈と補ふんし。ゆろるれ行きろいろあとんび。

熊い頭と低く羞る貌あり。遂ふ逡巡しく木立の間ふ躲ぶしぐ孫十郎い
ことぶふく大ふ歎び。薄雪姫ふさゆきるいきのふ家と出ぶし
ろうぶきを曾らしく出らゆ。今ろ勿りいい。彼兵四郎も落虎えまろう
び六波羅の走卒と稱るも彼ぐ影計ふく。死ゆろとひしい佞ろるび。
ろふろとうもろしき。榎嶋小殿ろんどふ盗賊。この山ふ躲ぶ住て。
行客と悩をるい粗洛ふも少えろう。既ふ猛虎の口と脱ぶく。吏ふ毒
蛇の腮ふ入る。今速ふ奔ぶるどい絶ふ天日をえぐさかるび。賊の沒ふ
間ふ。ろく逃ぶうんしとふ。薄雪ぶと點ぶく。さらび薄と解くふ
んとく。ろのろうふ立ろうのいい孫十郎頭と捧く。いるとびしい苦集
滅道ふくおとるとい。足と折しぶ又彼賊ふ髑骨と鋼掬ぐとれぐ。
ゆゆや薄索と解ふとも。輙く山とゆるべうもわえぐ。加之主従め絶

ともふ奉らんい熊いつゝ懈を責らるとて。賊の為ふ殺さるゝ軟彼畜生あいあるとゞ。つゞ一言ふるの非とまゝるく。守ふ放るるの仏。うくもまりぼるつゞ身と。怨ふ脱んとしく。熊と怒地ふ罪ろいたんいるの仏却獣ふも苦まろ。り〜強く伴ひまゝんとるらべ。柱ふ頭と打砕き。面あるり死〜て後のゝひあらせとと。武い怨う武へうち歎く。あべく諫うーらめとゞ。薄雪今ふ已とゝ仏ゝるゞ。寔ふ汝い恩顧の老嚢ふもあらめ仏松主ゞ縁〜ふ繋ゞ身。憂ふ仕つく身と殺と。過世いるる因やあるりんり〜今生あく報ひ仏ゞい来世いるる又かくゞあるべ死。縦ゞう留るとも。いるふもしく死と脱まゝ。つまも天地ふ祈請〜と。再會とまつゝと寔ひく。雨るも涙ふゆく先るゞ。海立るわくゝゝゝゝゝべ孫十郎うち腹ち。るるる歎るふ時後まるゞ。悔とも交ふかひあらじとく。焦燥声も高ゞ

せゞ。後堂へ少せゞ漏さゞと頻ふ岡る便るふ。あひゝしく走り出。何地ゝう逃まらんと。ゝゝゝしゝふ峨くゝる青嵒仰げい高く。俯ゞゞ又目眩く。一歩も足の踏ゝるゝとあらゞ。雲いゝ近くしく茂樹枝とうらね。水も遠くしく翠竹根とゞ〜ゞ。ゞゞめ求ゝし路と走らべ。彼賊ども沙るふあるく。忽地捕らゞ。さゝとく外ふ路もあらゞとゝんかくゝんとゝひるるゝふ折しも。件の荒熊走ゝ来く。薄雪と背ふ乗ゝ。須臾ふしく山の半腹ふ到り。ゝゝゝ下しく舊の高峯ふゆゝるゞ薄雪姫へゝゝとく感激ふ堪ゞ。遂ふ麓ふるるく。只顔ふ走るゝへべ。湖水もやゝ近うるうぬ。時ふ一人の旅客馬るの山道るゝと出く。端ゝく走ゝゞ。薄雪姫こゝくゝと呼びゞ。いらいを山賊ふ捕まるるのるゞ。からゝじて今脱まゝ。家あるゝゝゝ住ひくるるゝしと宮ふ彼男えゝゝ。

今津
江州高嶋郡
船著えまち
ろう竹生嶋
まぐ船のと
三里あること

菅浦
大浦
江州浅井郡
の内竹生嶋
ろう菅浦迄
水上五十あり
といふ
大浦ハ竹生嶋
のしもまち船
著へ大津まで
船の上十八里
竹生嶋
江州浅井郡
改暦難事ま
ちの嶋景行
天皇の十年
湯出ありこれ
弁財天出現
の霊地なり

つまも今彼処の山間あく山賊ふ出あひ同行の旅客十人あまり残殺れ。とりわけ李も殺りあく奪はしが幸ひ〻必死と脱れ。ひとり逃れ来りあり。あとえまん。其方ふんあるい今津の濱ふく。いつも今こころい大浦菅浦又竹生嶋ゑど人渡を出船あり。彼処より船ふ乗らべ輙く脱れ〻課こと〻。携急まんとりんび薄雪いふ〻〻こび雪えいう〻走りく伴の濱ふ到りあふ折しもあとに今菅浦へ〻ちとく漁を鮮く船あり。色焼俵と旅客い遠〻く薄雪を扶引く。案ふりあれ〻船人ぐく糟出せり。浩処ふ〻殿荒平太い鞠の小賊を時く追ひ来り。ゑの船ふ乗と。薄雪いおるく。頭と擡くえふふ孫十郎ゑ首と熊の首と切く。鉾の先ふ〻ふらあるふ小賊ふ〻し。荒平太ゑ彼此ゑ走りぐく追留んとるふ。今朝ゑ竹生嶋へ渡りん。船

一艘もゑ〻しぐ。きとく殺りく。ゑるゑゑともふ水際ふ下りゑゑ。箭と射懸ゑと雨のごと。薄雪い既ふ孫十郎ゑ殺ゑゑゑ〻ゑ〻く。とくゑゑ〻び鞆さんゑ〻故ふ殺ゑゑかとゑゑ〻。物ゑゑ今更ふ狀なし。ゑゑふくも彼賊い一ゑ〻び山へ立ゑゑく。又ゑ〻い追ゑん〻らんふ何処ふ捷径ありゑ〻く速ゑる。げふ彼ふゑ出波自在ゑふとゑ。ゑゑ波羅ゑゑも捕案巻けゑゑく。ゑゑ膳を冷〻ゑ。ゑい〻〻、案ゑゑ〻ゑゑ十五六人の老弱いゑゑく結ゑゑ〻特ゑゑ。船人もいの故ふ〻まゑゑねども。射ゑゑゑんゑゑゑ〻ゑゑ〻ゑゑかと竭〻く糟退んとゑゑふ風いゑゑふくふ逆ゑゑ吹く。船ふ〻ふ処ふ漂ふゑゑ〻ゑゑ〻び衆皆ゑゑ戦慄ゑ。船答ふ伏累く。絶く膳仰ゑゑゑ〻ゑ〻ゑ船人い薄雪ゑ伴ひゑゑ旅客ふ勢ひ。高原の山賊い。六波羅どゑも捕難ふ癖者ゑゑゑ

船著
和名鈔ニ船著ハ
ヲ船ノ泊ル所
舟中の床物
と蒲門以ル
ヲ船ノ和名
市奈度ナリ

このとき〳〵出て。人と聞しるこそ見ゆりぞ。あつまる中今いふ船に向ひ。頻に矢を射かくるハ。この男女なりと求るこそかしこきハ身が故郷なりの伴ふやと向ふ。旅客ハ面色湖水よりも青く変ハそハなさで。賊の求るハこの女子なり。わきハ只假初に伴ひまゐるのミともかくもうけへからひ出てといふ。船人ゝ見くさるべきをいふおのがなるに違ざりけれ。二人の命に影の人いかゞとし。船と艚戻しくこの女子を遁すべし。必死と眺るべしといふ。薄雪姫ハ是ハ見もあやぶつと身を起し。いかゞ船は艚ハかぎをもぐるも盡じ。それハ面あをり湖水に投げつ。賊の望ば影にハあらじ。已ハかくといひも終らず。直に射かくる矢先に向ひ。艫より墜落て。千尋の底に入るのミ時に浦風颯と吹かけて。船の走ることも射かくる矢よりもはやく。三里にあまる波上を。一瞬の間に乗つけて

余吾湖ハ志津ヶ嶽の下にあり伊香郡に属す。ちかきのほとり越前の界下ハ野坂集福寺ハ浅井郡に属し越前国堺をさる四五里にあり

菅浦に著ければ。船中ハはじめて活出て。やがて陸に上らんとするを船の辺に人ありて。頻に喚く声をきゝかゝる怪さ。其古老集合て水際をさし覗に。鬢子入水せしとおもへる男女長き袖の真中と船の半腹に射著られて。その半身胸より上ハ水を出。腰より下ハ水にひたりて。なかば死たれど。船に引れて未だ死ずありけるなり。その形容をミるに大に驚きさて。いかにもと罵り騒動ぶ船人やがて船に引揚。彼旅客ともにも勧るべし。半晌ばかりにして。やうやう甦りもしたり。衆合の老弱ハ。おもしろきもいと奇なりとしく。寔に九死を出て一生にあふ。命めでたき女子なりと祝して。余吾志津が嶽のほとりゆくもあり。野坂集福寺のかたへゆくもありて。ものがたりなどしてゆけば。旅客ハ薄雪をまもり浦屋の

簷下に憩ひしが、さくいふやう。鬻ぬ事急ぎて行くも何ざらしぬ身に
洛の入るべきぞ。何地へ行くべく。賊に奪はれたるとぞいふ薄雪
姫答へて。実ふべくもあらず清水寺のわとりに化るりめん種この憂と
ふかんらいくこへ来るまぐくの難苦い一朝に説盡つるもあらじ。
まうるふこゝろども。再生の恩を蒙ることこゝろのき僥倖ろうるはこの
うへの庇あり。家まぐく送りこゝまうるこんやと宜へば。旅客勢ひく。
洛へ送りゆく途厳しあいあらねど。わとい越前四ろう。月毎に山城
近江へ出る商人に。鈍五郎と呼ぶくりめん。まうるに擔物い悉く山賊
に奪はれたるとぞ。故郷へ帰らざるべ。後の活業と
なるべがし。況とこゝろ越前い近く。洛い却遠し。出身ひぐ郷導に得
んとこゝろべ。こゝろ越前へ伴ひさくこゝろぐのこゝろなるべ。

越前の藩角鹿い郡の名。今義賀に作る。この両処いに人こゝろ安ろ

こゝろべ洛へ送りゆくべ。かくていいこゝろあらんといふ落雷ゆえ去し
思案しのこゝろ。孫十郎こゝろくなりとい別に便とする人もあらめ。ひとり
洛へゆらんと去べ。途ふく又難儀に遭ふあらんも量ぐし。殊更こぐ身と
責せこゝるもこゝる拐児どものこゝろしとおぼゆるに。毋もいこゝふこゝろひ
んいとおのこゝろし。まぐこの人に伴ひてく越洛に到り。洛の伴ひ
毋兄のこゝろに少定こゝろく。ゆるこゝろとも遅こゝろあらしとおぼゆ。
所理こゝろ。どもかくもこゝろに計くこゝろとしとこゝのこゝろ。
鈍五郎に沈び。戎い輜に楽し。馬に備ひいこゝく他こゝろく衣抱しく。
遂に越前こゝる。三四の藩に到りぬこゝろ鈍五郎ぐいこゝろ。こゝろ
妻子もこゝくこゝ。こゝろぐ自在こゝるぐど。又こゝろこ女子の男に比こゝる
家に起所しこゝぐ。こゝる後こゝくこゝ。夜を安く寝ぐこゝからん。さの

揚巻

和俗勾引の字を用ひ勾引い西廂記ふ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
和訓[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

漂ふ[illegible]日[illegible]支加する豪家あり。[illegible]其処ふ[illegible]置べ[illegible]。
[illegible]も安くもぶして。洛へ送りゆく日と沿へとく。いと信ふく
[illegible]。薄雪少くきとく[illegible]ひ。[illegible]く[illegible]そ彼家ふ到りあひ
[illegible]柳[illegible]の鈍五郎ハ稍客ふく。間常ふ彼此の女子を拐挈し角鹿三回
の妓院ふ賣る。ふ美の賊を掠とる悪根[illegible]。今ふ彼ゞ薄雪弧[illegible]
[illegible]く誘引る家いの。[illegible]第一の妓院ふ[illegible]く。主人と角鹿の柏婆
といふ。嗚呼痛哉薄雪姫。[illegible]ん[illegible]く油を沃ぐ。[illegible]弧[illegible]く。渇と
加。遂ふ鈍五郎ゞ毒[illegible]ふ落く。洛柳[illegible]花ふ[illegible]。[illegible]
[illegible]身の果[illegible]。

[illegible]ゆ[illegible]前編巻の四畢